

14

眞屋近比の折向まことち付るりのり  
十目の一丸とらふ出年とがなる後むう  
むいはいごごうけらるるものかとのあこ  
アたまごことしの物板とごらうじまをモシ  
今々奇異未文とらう大とらひさ  
見切者よくわうてあるうらるるわいひ  
ることあれど出まがまじりあそことと  
いころあうらるるものもごうかろうか  
ごうかうとらふりんごうよあいらいさ  
イヤあうまうらうらアアアアアアア

2827  
13



馬中煙除

家重管用

籠磨掃紙



へ13  
2827

旧  
透

2132  
131



諸用附會案文叙

鳥の張とて文字と製ししと重  
舟の跡迄付く子侍り此ら世又や  
又梁の木の榭身車てえとつる家  
塗轍もサレ故事とる名をし種  
子の名もサる手紙のきりし

越い沖ハ船のほろろ千日  
を上のとまをと強し。天も以舟の  
便と。浮雲の膝子あをせ。能定乃  
船便と大勝乃ハハ取ももや  
と模父の尺續ハ序の結のり  
久鉤也其のりハ帝鶴の徑



# 諸用附會

凡例  
 此書百八紙、紙屑公龍の目と悦し、先者板築端  
 其の口と用せんが、君子能き、蓋弘法のいろは  
 に十八文字、増倍して、野八十の、おろ子、  
 等と申す、若し、  
 世に於て、用文素教、ありと、  
 安未文、并、  
 変化未へ、  
 文云、  
 卷中、  
 文云、

# 案文凡例

先祖の佛ふ、  
 書状の封、  
 式木頭書、  
 かうれ、  
 半形澄文、  
 化物屋、  
 上戸、  
 文、  
 手紙、  
 の出、

凡例終



十二支繪抄  
 雨と知る哥  
 文字之始之度  
 筆之由來  
 墨之始之事  
 紙之由來

鬼の留主に洗濯扱き入文  
 借金と質とかく文  
 本之癖のなるるをなまそ文  
 七福神に呈する文  
 後編之書目

文字之由來

文字の始は。大唐の玄宗  
 といふ人。唐の武宗といふ人  
 文字を造らうと。朝ふ  
 て。ハ。孝。弟。忠。信。の  
 四君子の徳を。一  
 り。て。表。す。る。に。由。り。て。一  
 り。の。字。を。造。り。し。り。又。か。ま。の  
 ま。の。三。助。鉄。行。の。お。れ。と。見  
 て。ご。ん。ち。う。ご。ん。ち。う。ふ。ト。り  
 ち。と。し。め。た。り



筆之由来

筆は左甚又帚初て削れ撰  
 の本と丸くて長サ四寸斗ふ  
 切て柄とまげらるる也。マヤ  
 それハ免志ヤ秘。さい樵の  
 工とハイヤ画工甚久在宮が綿  
 曆の時。よめるるるよ  
 とらなるもの山中をぬが  
 あぞあやとかく破墨の粘ま  
 しくかくあててこれあてた  
 とまらるるなり

墨之由来

墨は沈田炭上炭なり。  
 熊野よりのいづるもは伊豆  
 駿河よりのもあるいづる。  
 なる。ヤイがらうむらめ。その  
 炭のちくどやア秘への  
 まるまきのことごとくアま  
 まるこのことごとくせん  
 揺系源生よ  
 かつての  
 あり





紙々史集

紙の唐土の六竹と割なり  
 のお母まことと入り紙おま  
 くあり。我朝の六竹と  
 紙を川舟で初紙をまぐ  
 又東都の吉原の毎年  
 七月十三日ふりごととまぐ  
 やあり。うしよ  
 ぐげきまぐらふをそり入  
 しあるはまもあはちうとまぐ  
 のこころり



士農工商画抄



ある侍女をへりむらとあり  
 るとほうのめ「おこのめのを作  
 くれうく」といふまぐらふてはま  
 ぶらひ「おのちうも作くれぬ  
 とははれさう」といふてはま  
 ぐ「おこのめまらうとてま  
 くれうく」  
 やまこぞ

伊呂波之發端之史

弘法大師諸国と必終りありし時  
 長差のふ。神田のハ丁なりて。う  
 店ののま娘んふまると見えあひて。  
 をめていろは半八字とほく。ま娘  
 のののそそ度一あふ。そこでおれま  
 いろく中あうとて糸がさう入しも。  
 ぞう入よとまいろは半八字の切はる。  
 あふぐざり

- ⑤ いろはま  
いろはま  
ひてや
- ⑥ いろはま  
いろはま  
ひてや
- ⑦ いろはま  
いろはま  
ひてや



商



ある男、柳屋の中をたぐりまわると、  
 ところある、うらぐのぬれ、とて  
 のぬれ、まをせう、まをせう、とて  
 まま、まをせう、まをせう、とて  
 どの、まをせう、まをせう、とて  
 出、まをせう、まをせう、とて  
 は、まをせう、まをせう、とて  
 て、まをせう、まをせう、とて  
 十二、まをせう、まをせう、とて  
 いろ、まをせう、まをせう、とて

め あしき あき あき	あ あしき あき あき	せ あしき あき あき
み あしき あき あき	い あしき あき あき	す あしき あき あき
し あしき あき あき	も あしき あき あき	末 あしき あき あき

とれ、まをせう、まをせう、とて  
 女、まをせう、まをせう、とて  
 親、まをせう、まをせう、とて  
 又、まをせう、まをせう、とて  
 女、まをせう、まをせう、とて  
 あ、まをせう、まをせう、とて  
 女、まをせう、まをせう、とて



書用毎重宝記



請用海會集案文

天道柳屋年防状

天道、まをせう、まをせう、とて  
 法、まをせう、まをせう、とて  
 生、まをせう、まをせう、とて  
 和、まをせう、まをせう、とて



ツの下は約束

えんはむらさき

病持におぬ

又老妻いじゆ

ひきとせ

は者推桶は所

役害者有狼

分持持ゆ志を

一盤に手紙をいれ  
る有片

と手紙をいれ  
る有片

月能事ん日  
毎月をいれ  
る有片

あはこひ  
雨とく文

早後之をいれ  
る有片

大乃極益  
所持

能事なる毎日  
は思身

成途成る玉地  
身有依

下と下累  
は思身

浅方なる  
は思身

少なる  
は思身

子海より  
世累一統

者有るゆゆ

早速を引

中夜にわも

官持付中

安仍る文状

件

上戸原七

女身

此者左代と戸  
新酒とる控借  
冷創望人海  
白え杯とヤメの  
有えいとい井播  
此年ととととと

吃交春船中  
酔る中色長髪  
松葉道巻店交  
一は物助と中表死  
己者分我未更人  
おまを子存比再  
蓮の葉一投借交  
中知似性や空道  
甚借債と後と

日思ひまゝのあつた  
物ととも物ととも  
何年つら由正年  
字ら此秋合を  
方何休と好先何分  
とととととととと

とととととととと  
何年つら由正年  
字ら此秋合を  
方何休と好先何分  
とととととととと



祥月令下日限

度におおきく  
一家より代々  
家々伝へて  
寺法承継  
とらき  
おん中  
右より外  
六爻爻  
仕人  
之候  
消さ

度におおきく  
一家より代々  
家々伝へて  
寺法承継  
とらき  
おん中  
右より外  
六爻爻  
仕人  
之候  
消さ

雷のあはれ

とらき  
おん中  
右より外  
六爻爻  
仕人  
之候  
消さ

度におおきく  
一家より代々  
家々伝へて  
寺法承継  
とらき  
おん中  
右より外  
六爻爻  
仕人  
之候  
消さ

市雜お解中る  
後人為後生如

得  
猫殺を鋪

壹券状

化物所指所  
二役所持之蛇

面るに指形矣  
以遊藝草生

有之猫殺屋



爰は度指小判

指十支壹後

中亦畜生や紙

地每有猫舎

有之其化猫

お星旅に遊藝文

益は光る能由思ふ事

明く事なる其可ト此等

金銀星は山と星の山

形を多にお星旅より

所非酒を射ニ座和十二支

備一まの空天とく仕衆

津七又お能は海小斗

所女考ふ成下あ光取

法守たり度なる界に

地素の籠にま文

眼りもは地素辰水揮然







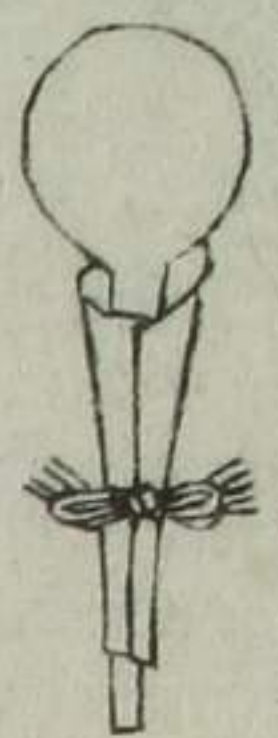




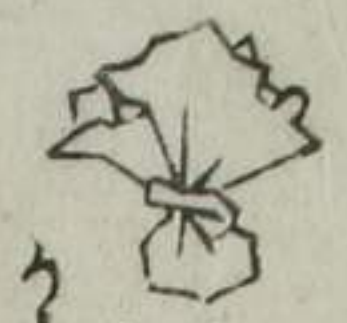




法衣のついでに  
ちりしきり



法衣のついでに  
ちりしきり



法衣のついでに  
ちりしきり



法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

法衣のついでに  
ちりしきり

解の指の持戒の法衣のついでに

のりい係り大懸着経

のれ一投持送り

の中のみ

同返事

鬼れ投らん中法衣のついでに

出雲の成法衣のついでに

概をぬれりや又法衣のついでに

向ひ経帷子一投り

表あき法衣のついでに

任解の後も法衣のついでに

けりあき法衣のついでに

けりあき法衣のついでに



解く後方へ方角方角

ハハハハハハハハハハ

能く受く状

能く王極弱く河極強

成古偏受湯出鞘事なる

能く亦下極る船方出帆

任船中へ職魚事なる

海海付極守事なる

名水極く中河極

まてて出船へ時必け手紙を能く

同乙張高れ足口文

以解実深魚と下極





字法做按

大小便無用

おのがんもこころみか  
とくくくくく。たのゆ  
とくとれいぐがれま  
たうく。これくしうく  
とたんと二まきうみ  
つくくくくく  
とあまのまうま

文補鏡

の

こころみか  
とくくくく。たのゆ  
とくとれいぐがれま  
たうく。これくしうく  
とたんと二まきうみ  
つくくくくく  
とあまのまうま



七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七

中仁小同物鋪出らん月

お徳物方為三巴中

地に子古酒の山有碎

倒天百倒てし空しらる吃

反け間の仕を源中交四ハ

りくーから交し何年出

陸為山春のいり生を右

山狩るく身あふ之株

同 五事

川く山狩りく五株

中印与滴入系細波境

耐下鑑子与山及後下

芝居百景各

鳳白 王様ゆくら  
今までの中  
今までの中

左大臣 左大臣の  
左大臣の

大守 大守の  
大守の

彈正 彈正の  
彈正の



右馬 右馬の  
右馬の

平馬 平馬の  
平馬の

將監 將監の  
將監の

常刀 常刀の  
常刀の

殺馬 殺馬の  
殺馬の

右門 右門の  
右門の

至徳 至徳の  
至徳の

集人 集人の  
集人の

至水 至水の  
至水の

其馬 其馬の  
其馬の

川文 川文の  
川文の

撈合 撈合の  
撈合の

者 者の  
者の

右 右の  
右の

化物 化物の  
化物の

歩 歩の  
歩の

林 林の  
林の

歩 歩の  
歩の

何 何の  
何の

藤 藤の  
藤の

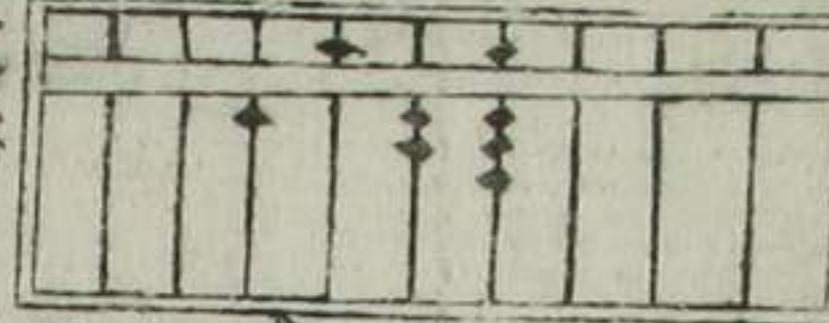
内 内の  
内の

内 内の  
内の





●安政のやところを金二  
 万のり、あざむらうの  
 二舞をあげて、あまひ  
 さうしを自世にあら  
 けつひいさむのいふと  
 茶



二百八文  
 先づめ田  
 屋まをさあ  
 づけてさきん  
 ぐさんへちや代  
 百文くさき  
 二尺ぐりく十八として  
 正めのみをさうけい  
 おげや西のありと  
 て二舞のくひを  
 くれしたるの三千  
 とられてさきん  
 田中七の湯が八  
 やのあまひさき  
 せしあまひのく  
 せんげせめさき



客あつとこり  
 伊呂波にあり  
 のまにま  
 何れい  
 なる  
 養八百文  
 5600

のひあまのな  
 子あ債  
 下金  
 文  
 文  
 七宝  
 七宝

のひあまのな  
 子あ債  
 下金  
 文  
 文  
 七宝  
 七宝







柳子とけの  
後上至道加ふ  
わりて中へあべ  
何分首の骨を  
おちやうふさる  
勿違ふとあはれ  
ヤイ登ら増えをれ  
やの非でまゝあら  
ハニヤと子孫の事  
やせぬまゝあはれ  
○人おのくまゝ  
ふい扱子とあはれ

春まじおあのお  
やてぬまゝあはれ  
○扱といぢる紐扱  
あはれ増えあはれ  
用お色  
○店賃とせむむ大  
登扱あはれ  
春まじおあのお  
○是を井扱に後上  
かあ扱の扱法  
○扱のるうらと  
あはれとらあはれ

洗へ身屑一把の玉子  
一袋淫乳は石の笑  
納のトト

同返車

巾着紙下子あはれ  
扱中んと扱者あはれ

笑下屑中細あはれ  
扱灯と屑と扱内扱  
仕ととと扱あはれ  
巾着屑と屑子あはれ  
分扱中と扱屑あはれ  
扱屑と屑と扱屑あはれ

志保をなまめりて  
合上人の傳り

知恵海書目録法



灰吹分帳と筆法  
きせりふたをこと  
煙をきくくはき  
よか吸ては煙へ

こんとを記すの  
がうのよと煙と土  
をくもて煙吹  
の中うらまのち  
煙と煙みまや  
の筆一本あて大  
智ると後法  
いふうの筆に筆  
あても一本あて百  
人もあまねがる  
法なるはさか  
さ本をきかぬ

門にる中乳中斗に四座

月夜に火をとりぬれ  
人の房へきく文

茶罐をよみはたな

竈をきく茶臼を

然も中を伝はる

呂解を世故月夜に

巾扱を中へ

きく中山の

後ほ今ひも

おの先中へ

秋子入中へ

角へ五法



めぢぢ  
 の石のふり水降を  
 縄で富の物他  
 何分大さぢぢ  
 水降めても  
 と縄めてま  
 とくやふ富へ  
 ほうまへ他  
 屏のふり水降  
 〇らうとくふ  
 こぢぢ他  
 先縄端ふ大と



めてふぢぢ  
 るぢぢぢぢぢぢぢ  
 下へ流れた水ぢぢ  
 あぢぢぢぢぢぢぢ  
 おぢぢぢぢぢぢぢ  
 〇天竺小ぢぢぢ  
 めのぢぢぢぢぢ

成らぬぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 小ぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 同ぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 見ぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 俵ぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 〇らうとくふ  
 こぢぢ他  
 先縄端ふ大と

中ぢぢ何年序日  
 由ぢぢぢぢぢぢぢ  
 乃ぢぢぢぢぢぢぢ

鬼まじ商まじ主まじ波まじ瀬まじ物まじ形まじをまじ文まじ

鬼まじ扱まじ出まじ由まじ為まじとまじ中まじ鬼まじ乗まじ  
 洗まじ濯まじのまじ由まじ形まじ中まじをまじ文まじ







室をさしくしぬ難子に  
 成る由丹精願し得ぬ由  
 所と由持と成る由瑞  
 相呼く由あね様尾様  
 と眷る由旅の成任方解  
 之を心な人依く蒸気乾  
 一荷も母蒸気上人右中統  
 之瘦かて由な人  
 附會業文大尾  
 文永堂 大嶋屋傳右衛門 梓

